

## 第5章

# 統合医学によるがん治療の 根本は自己治癒力の向上

### 統合医療とは

統合医学とは Integrative Medicine の略ですが、欧米では東洋医学などの伝統医学を意味する Alternative Medicine（代替医学）に代わって、近年この言葉が用いられるようになってきています。東洋伝統医学だけにこだわらず、西洋医学の知識をふまえた、よりいっそう高次の医学を目指す姿勢も感じられ好ましい用語だと思います。

数千年に及ぶ経験を背景とする治療医学としての東洋（中国）医学と、精緻な診断力を持ち、麻酔学の発展を背景とする外科手術の技術的発達を持つ西洋医学を組み合わせることが統合医学としての骨子です。

東洋医学の意味するものが、現在日本で一般に行われている漢方エキス剤（保険収載）を使いこなす程度の能力ではないことをまず明らかにしなければなりません。

病名と処方に対応させる「方病相対」という、ほとんど理論的説明ができない方法によってエキス剤を使う程度のことを、東洋医学あるいは漢方と思ってはなりません。ましてや保険収載されているエキス剤の保険適応症状は、本来の処方が持つ役割に比べると非常に限られたものです。たとえば六味丸エキスに適応症としてあげられているのは、排尿困難・頻尿・むくみ・かゆみの4つです。これでは泌尿器系等の薬かと思われませんが、本来の六味丸の適応は「腎陰虚証」と呼ばれる状態で、「先

天の本」と称される「腎」を構成する物質「腎陰」「腎陽」のうちの「腎陰」が不足した状態を意味します。喘息でも、肝炎でも、腎臓病でも、アトピーでも、とにかくあらゆる種類の病状の原因が腎陰虚であれば、適応となる処方なのです。日本漢方の診断は、先人の経験にもとづき組み立てられているために、中国医学と異なり、正しい診断、それにもとづく処方という明確な理論過程がないのです。

さて、話は戻りますが、診断における西洋医学の価値は非常に大きいと思いますが、治療に関してはどうでしょうか？ 世界の多くの国で感染症のほとんどが消滅あるいは減少するなど、細菌などの感染症に関しては一時勝利宣言まで出されましたが、近年新たな病原菌や耐性菌問題がクローズアップされ、むしろ突然変異によって抗生物質に対応する細菌側の勝利がささやかれるようにさえなっているのが現実です。

これは、人間に仇なすものは徹底的にたたき排除すればよいとする近代西洋医学の基本的テーゼの破綻の結果でしょう。医学に限らず、西洋文明は自然との共存によって、それを支配し征服することに目的をおいてきました。この考えが誤りであったことは多方面において指摘され反省されつつあるのですが、治療医学においては未だ不十分であり、依然として病巣を切除し、病原を叩くことが治療の根本主題になっています。こういった病原を一方向的に叩くという治療手法の結果、MRSA（メチシリン耐性黄色ブドウ球菌）などの重症感染症が問題となってきたのが現実です。

このような場合、中国伝統医学では全身の気・血・津液の状態を改善することで、免疫力向上を意図し、さらに抗菌作用を持つ生薬を併用し、煎じ薬として一緒に服用することで対応します。つまり人体の構成物質である、「気・血・津液」の量を補い、流れの滞りを調整することが免疫力向上につながるのです。この手法を用いることでMRSAなどに対しても1～2週間程度の服薬で充分対応できるのです。

日本人の2人に1人が死亡する、現代の最大の難病といえるがんに対